ア・ヴェ・チャヤーノフのソホーズ研究について

（一九二八年—三〇年）

小島　定

右に訳出した論稿は、我々の知るかぎりア・ヴェ・チャヤーノフが生前に国内で発表しえたおそらく最後の論文である。[1] チャヤーノフの研究活動の詳しい軌跡については、別の機会に譲らねばならぬが、ここでは、彼の最後の論文の紹介にあわせて、研究生活最後の時期の活動について少しく触れておきたいと思う。

チャヤーノフが、革命後のロシアにとどまったネオ・ナロードニキ系の農業経済学者として小農民経済の維持発展を主張する立場から、二〇年代末の全面的集団化運動の怒濤の如き進行とともに、社会主義的大規模経営（コルホーズとソホーズ）の支持者に転換したことは、すでに知られている事実である。[2]

一九二五年、ネップがいわば頂点に達した年に、チャヤーノフはそれまでの農民経済研究を理論的に体系化した著書『農民経済の組織』《Организация крестьянского хозяйства》（邦訳名は『小農経済の原理』）を発表した。その中で、いわゆる「人口論的分化」《демографическая дифференциация》の理論と「労働消費バランス」論《трудопотребительский баланс》を軸として「勤労的家族経営」の歴史的に「強靱な生命力と抵抗力」を証明しようとしたのであった。つづいて一九二七年には『農業協同組合の基本理念と組織形態』《Основные идеи и формы организ-

зации сельскохозяйственной кооперации» の第二版（初版は一九一九年）を発表して、右の農民経済論を理論的ベースにおきながら、農業生産の「垂直的集中」вертикальная концентрация の論理を駆使して、社会主義ソヴェト・ロシアにおける農民経営の将来の方向＝構想を提示してみせた。その構想は、ひと口でいえば農民自身の内発的な「協同組合的集団化」«кооперативная коллективизация» の概念に集約されるものであった。(3)

しかし、一九二七年十二月に開かれた第十五回党大会で農業集団化方針、社会主義的大経営の新建設の基本方針がでてから、チャヤーノフをめぐる状況は大きく変化した。もとより計画経済をめざすソヴェト国家の中で、小商品生産を本質とする小農経営の維持発展、これを基本的モチーフとしたチャヤーノフ理論に対して、マルクス主義農業経済学の側からの批判は、すでに革命当初からあったけれども（その代表はクリツマン Л. Н. Крицман とドゥブロフスキー С. М. Дубровский）、一九二七―二八年の農民層分化をめぐる二つの討論会(4)を画期として、チャヤーノフ理論に対するイデオロギー批判が全面的にくりひろげられることになる。そして「嵐のような」集団化運動が始まる二九年には、チャヤーノフ主義 Чаяновщина 批判はその頂点に達した。二九年十二月末の第一回全連邦マルクス主義農学者会議は、集団化運動の真只中に開かれ、最終日（十二月二七日）のスターリン演説で「階級としてのクラークの絶滅」が宣言されたことで知られているが、(5)この会議は　党内の「右翼偏向」とされたブハーリン派に対する弾劾と共に――さながら「ブルジョア的＝小ブルジョア的農業理論」一掃の大合唱の場となった。ここでチャヤーノフ理論は「ブルジョア的理論」としてのコンドラチェフ主義 Кондратьевщина と並んで「小ブルジョア的理論」の典型とされ、彼の過去の一切の学術的業績も「クラーク擁護」と「農村における資本主義復活」に導くという一点で暴かれ、断罪されたのであった。

これに先だち二九年二月には、チャヤーノフはかつての農民経済論の放棄と社会主義的大経営支持を表明し、自らの「イデオロギー転換」идеологический сдвиг を発表していたが、[6] 当時の集団化運動の熱狂の中にあっては、事態はもはやそれをも許さなかった。チャヤーノフのコルホーズ運動支持の表明も、また彼が手がけ始めていたソホーズ研究も、その会議の中では、「«а» を言う者は «б» をも言わねばならぬ」（ミリューチン В. Милютин）[7] として全く無視されたのである。その後、三〇年三月にスターリンの論文『成功による眩惑』が発表され、一時集団化の「ゆきすぎ」是正の時期があったけれども（本論文が発表された三〇年四月はちょうどこの時期にあたる。この事情によって本論文の発表も許されたのではないかと推測される）、再び集団化のドライブが高まるにつれ、同年九月には、いわゆる「勤労農民党事件」の主謀者の一人としてチャヤーノフは、コンドラチェフ Н. Д. Кондратьев、マカロフ Н. П. Макаров らとともに逮捕されたとの報道がなされた。[8] この事件は裁判も行われておらず、今日では当時のソヴェト権力によるフレーム・アップ事件であったと広く認められているが、その後の彼の消息については、我々は一九三九年に流刑地アルマ－アタで死んだということを知るのみである。[9]

こうして一九二八年以降三〇年四月、あるいは遅くとも三〇年九月（チャヤーノフ逮捕が報ぜられた時点）までが公的に許された彼の農業経済研究の最後の時期といってよい。この間、彼は国立農業経済研究所 Государственный Научно-Исследовательский Институт Сельскохозяйственной Экономики（今日の全連邦レーニン名称農業アカデミー ВАСХНИЛ に含まれた）に所属して、二八年三月に研究所の会議で報告したのを皮切りに（後述チャヤーノフの著作①）、一転してソホーズを中心とする社会主義的大規模農業の研究に従事したのであった。この期間に彼は、今日我々の知るかぎりで以下にみるような一連の論文と発言を残している。

① 「ソヴェト経済の条件下における大規模農業企業の組織計画作成の方法」 Методы составления организационных планов крупных с.-х. предприятий в условиях советской экономии, «Бюллетень Государственного Научно-Исследовательского Института С.-Х. Экономики», 1928 г. № 1-4.

② 「ソホーズ思想の進化」 Эволюция идеи о совхозах. «Совхоз», 1928, № 9-10.

③ 「大規模農業形態。ソホーズ、巨大農場——ヂゴリア・コンビナート——我々はアメリカから何を借用できるか?・農業過剰人口根絶の諸問題」 Крупные формы сельского хозяйства, совхозы, гиганты,—дегорский комбинат, —что мы можем заимствовать у Америки?—проблема ликвидации аграрного перенаселения, «Экономическая жизнь», 15 ноября 1928 г.

④ 「農業のありうべき将来」 Возможное будущее сельского хозяйства, в кн. «Жизнь и техника будущего», под ред. Арк. А.-на и Э. Кольмана, М-Л., 1928 г.

⑤ 「階級的農民協同組合から農業の社会主義的再建へ」 От классовой крестьянской кооперации к социалистической реконструкции сельского хозяйства, «Экономическая жизнь», 15 февраля 1929 г.

⑥ 「大規模農業の今日と明日」 Сегодняшний и завтрашний день крупного земледелия, «Экономическое обозрение», 1929, № 9.

⑦ 「大規模ソホーズの設計の問題によせて」 К вопросу о проектировании крупных совхозов, «Совхоз», 1929, № 11.

⑧「穀物工場の技術的組織」Техническая организация зерновых фабрик, «Экономическое обозрение», 1929, № 12.

⑨「編集部への手紙」Письмо к редакции, «Сельскохозяйственная газета», 12 декабря 1929 г.

⑩『農業経営適正規模』ドイツ語版 Die Optimalen Betriebsgrössen in der Landwirtschaft, Berlin, 1930.

⑪「社会主義農業建設の技術的経済的諸問題」Технико-экономические вопросы строительства социалистического земледелия, «Научное слово», 1930, № 4.

ここで右の諸論文に現われたチャヤーノフの研究の特徴に少しく触れておこう。

まず第一に、彼の研究対象が大規模ソホーズの組織化の問題にほぼ集中している、ということであろう。当時「穀物工場」зерновая фабрика とよばれ、穀物生産に特化した大規模ソホーズ、いわゆる穀物ソホーズ зерновые совхозы の建設方針は、農民経営そのものの大衆的集団化が開始される一年以上前の一九二八年四月、党中央委員会政治局の特別委員会（議長は M. И. Калинин）における審議に始まり、本論文でも言及されているように、同年七月の党中央委員会総会の決定、及び八月一日付ソ連邦中央執行委員会人民委員会議の決定（本文七九頁参照）において公式にその基本原則が確定した。[10] 周知のように全面的農業集団化への契機となった穀物調達の危機、及びその原因とされた穀物の商品市場化率の低下という事態に対処するため、まずもって新規の大規模ソホーズ建設が企図されたのである。そしてその新ソホーズの基本任務として五ケ年計画末までに年間「一億プードの商品化穀物の産出」[11]が掲げられたが、この新（穀物）ソホーズは、何よりも「自由な土地フォンド」（辺境の処女地及び長期休閑地など）の上に建設が予定され、したがって当面は「農民『分与地』に手を触れない所」で展開することが定めら

れた。[12] 一方では農民経営集団化の基本形態と方法がまだ明確に定まっていない状況の下で、しかも他面で当面は農民経営地の外部で粗放経営として建設するというこの方針は、集約的農民経営の発展条件とその将来に特別な関心を寄せてきたチャヤーノフにとって、一転してソホーズ研究に移る際の内面的抵抗感をやや緩和する働きをしたと想像することができる。またそれ以前に彼の中にソホーズ研究の素地が全くなかったというわけでもない。二七年に刊行した協同組合論の中でも、農業生産の「水平的集中」горизонтальная концентрация の形態として、ソヴェト経済の条件の下でコルホーズやソホーズ形態の発展拡大がありうることを認め（しかし、この二七年段階の協同組合論では、その方向が主流とはなりえない、「垂直的集中」の補完物にすぎない、というのがそこでの結論であったのであるが）、とくに「ソ連邦の南部、南東部及びシベリアの粗放穀作地帯」では大規模機械化農業を展開しうる可能性があることをはっきりと認めてもいたのである。そしてそこでは農業企業としての社会主義的大経営の組織にかんして本格的な専門研究の早急な必要性をも指摘していたのである。[13]

それではチャヤーノフのソホーズ研究の中味に少し立ち入ってみることにしよう。本論文は、管見のかぎりでは彼の一連のソホーズ研究の諸論点を大まかな形ではあるがほぼ集約したものだいえるが、他の論文にも触れながら、彼のソホーズ研究の主要な論点を紹介してみよう。

チャヤーノフがゼルノトレストで具体的に立案されていた穀物ソホーズについて、そこでの基本原則の全般にわたってその現実的な可能性を、とくに「技術的＝組織的側面」　こうした視角がチャヤーノフの研究の一つの特徴である　から吟味したのが上記⑧の論文である。そこでは㈠ゼルノトレストの予定する土地フォンド二、五〇〇万ヘクタールの確保が可能かどうか、㈡その土地フォンドが「もっぱら畜産地帯となっている辺境やきわめて乾燥した地

域」に広がることから生ずる特殊な農耕方式上の諸問題、とくに新建設のソホーズは穀物単作経営か、それとも穀物－畜産複合経営かという問題、㈢新ソホーズの中心思想とされた「一〇〇％機械化」の可能性如何、㈣計画される巨大農場の最適経営規模の問題、以上の四点の問題設定がなされ、それぞれ具体的に検討された（⑧ стр. 95-99）。まず土地フォンドにかんしては、辺境地域や南部南東部の処女地や長期休閑地で基本的にその確保が可能であること、農耕方式については、土壌水分の維持に特別配慮しながらも、アメリカの経験に照して「休閑―小麦―休閑―小麦」という休閑式二圃制が、予定される地域の土壌の条件からみても（「大部分は暗褐色、明褐色に移りつつある黒土であり、すなわち小麦地帯の小麦に適した土壌である」（⑧ стр. 98））、また資本効率の面からみても（畜産経営を含めると畜舎等の建設に更に膨大な投資が必要となるので）、充分に可能であり、かつまた有利でもある、と評価した。次に「一〇〇％機械化」の問題については次のように述べた。新ソホーズ建設が提起された当初は、[14] 彼自身その問題には充分な確信がもてず、当分はトラクターと並んで雄牛の利用が必要だと考えていたけれども、最新のアメリカ式農業機械技術―トラクターとくに無限軌道トラクター、自動車、コンバイン―を導入した「一年間の活動」の結果は、このいわば「雄牛のなごり」волловья отрыжка を一掃するに充分なものであった、と（⑧ стр. 99-100）。また彼は別の論文⑥において、このアメリカ式農業機械が農業経営組織に与えた巨大なインパクトについてとり上げ、その中でも次のように述べていた。

「無限軌道トラクター、コンバイン、自動車輸送　このアメリカ式機械技術の三位一体は、我々の手持ちのデータから判断するかぎり、現存の農業技術と穀物経営の組織の中に、その意義からいって工業における蒸気機関の出現に匹敵するような技術変革を持ち込んでいる。改良連結農具その他一連の最近の技術的成果を伴なうこの技術的

三位一体は、おそらくこれをフルに利用しうる唯一のものである大規模機械化経営の手に、他のすべての穀物生産の組織形態に比べて決定的な、圧倒的ともいうべき優位を与えている。」(⑥ стр. 39)

なお、右にみるようにいわば農業における産業革命としてとらえられた農業機械技術の革新が、チャヤーノフ自身によって自己の「転換」の大きな理由とされたことも指摘しておかねばならない。(15)

さて、以上三つの論点を踏まえた上で、チャヤーノフは最後に巨大穀物ソホーズ経営の最適規模の算出を試みた。チャヤーノフはすでに以前から農業経営適正規模にかんする専門家として知られ、これにかんする専門的著作も残しているが、彼の適正規模理論の大きな特徴は、「経営内運搬費」のファクターを経営規模拡大の制約要因として第一に重視するという点にあった。新ソホーズの最適規模算出にあっても、この論理に従って、しかし第一に牽引力にかんして馬からトラクターへの転換、第二に、新しい労働組織形態として「野営式労働方式」の導入(その内容は本文にも述べられている)、この二点を主たる変化要因として、建設さるべき穀物ソホーズでは、それぞれ八、〇〇〇—一二、〇〇〇ヘクタール規模の耕区 участок に分割された(「技術的操業単位」)、総面積一〇万ヘクタールの巨大な「単一経営」が可能となる、と結論づけた(⑧ стр. 100-101)。彼は明確にギガント経営の支持者となったのである。なお、一九三〇年四月の日付入の序文をもつ上記⑩の著作(『農業経営適正規模論』)は、一九二八年に刊行されたロシア語版第三版からの独訳であるが、新たに右にみた新ソホーズの適正規模に関する部分を増補したものである。

以上紹介した穀物ソホーズの建設にかんする諸論点はさきに訳出したチャヤーノフの最後の論文にもほぼ踏襲されているのをわれわれはみるであろう。

右の議論からもうかがうことができるし、また本論文の「三、新農業の経済組織」にもみられるように、チャヤー

ノフのソホーズ研究のいまひとつの特徴は、計画経済の下での独立した企業経営としてのソホーズ経営の問題を解明しようとした点にある。チャヤーノフはソ連邦の中でもっとも早くこうした問題に取り組んだ一人であった。

一九二六年三月十六日国立農業経済研究所の総会で報告した、個別ソホーズの経営組織化の方法にかんする論文（上記①）の中で、チャヤーノフは問題を次のように提起した。新ソホーズはソヴェト国家の「経済政策の装置、大衆的経営に対する計画的影響力行使のための装置」として位置づけられるが（これは新ソホーズが「農民的農業の社会化の強力なテコ」として二六年七月党中央委員会総会の決定[16]の中で位置づけられたことを念頭においている）、「しかしそれでもやはり、その内部で回転する資本の再生産をその活動の中で保障しなければならない企業にとどまる」（④ стр. 5）。彼は一方ではっきりと「過渡期の時代には我々はソホーズを商品生産的タイプの経営 типы товаропроизводящего хозяйства と全く別物とみることはできない」と述べ（④ стр. 13）、当該ソホーズを指導する「国家機関の計画的任務」に反しないかぎりで「もっとも収益的な」経営をいかに確保するか、これがソホーズ組織化にあたって、チャヤーノフが提起した根本的な問題の一つであった。しかしながらスターリンの次の言葉が（『偉大な転換の年』一九二九年十一月七日発表）当時のソホーズ建設の形態を規定していくものであったとすれば、チャヤーノフの農業専門家としての発言がまともに受けとめられることはなかったといわねばならない。「五—一〇万ヘクタールの大穀物工場を設立する可能性と合目的性に対する『科学』の反対はくずれおち、こなごなにきえうせた。実践は科学から学ばねばならないというだけでなく、『科学』も実践から学ぶべきであるということを、もういちど実践ははっきりとしめして、『科学』の反対をくつがえした」[17]。この言葉がやみくもに大規模なソホーズの建設を鼓舞し、かの「ギガントマニア」の現象を生みだしたことはよく知られている所である。こうした雰囲気の中で、「商業的収益

性」などといえば、まさしく「くずれおちた」はずの『科学』（＝「ブルジョア的＝小ブルジョア的農業理論」）の復活とされる他はないであろう。そうした事情を考慮したのであろう、チャヤーノフは三〇年四月の本論文ではもはや「商品生産的経営」という言葉は使っていない。しかし、問題の本質はなお変わってはいない。

いわば「熱狂」の上に推進されたソ連邦の大規模ソホーズ建設の初期の実態は、「ギガントマニア」、極端に専門化した単作経営による土壌の消耗、アンバランスな機械化であり、その結果は、収穫の低下であった。[18] しかし、熱狂の波がひき、やがて「日常化」《Veralltäglichung》が始まるとき（ソ連邦をとりまく状況がこの『日常化』の到来を大きく遅らせたことも知っておかねばならない）、「経営」《Betrieb》の問題が不可避的に現われる、そしてチャヤーノフが提起した「国家的計画的任務」と「商業的収益性」との関係、調整という問題が正面にでてくるであろう。この問題は社会主義的経済システムに宿命的につきまとう根本的な問題でもある。我々がチャヤーノフをとおしてみるように、ソ連邦のソホーズ建設の当初から問題の所在だけはすでにはっきりしていたのであった。チャヤーノフが研究所の総会で、彼としてはじめて本格的なソホーズ論を報告したときも、同僚たちの議論と批判はまさにこの点に集中したのである。そのことはチャヤーノフの論文に付された編集部の注が明らかにしているところである（⑪ стр. 14）。しかし、この問題はチャヤーノフにおいては（も）、やはりなお抽象的な（しかし重要な）提起というにとどまり、以後の実践的＝理論的な解決を待つ課題であったといわねばならない。

最後に、チャヤーノフの研究生活最後の時期に現われた彼の思想上の一つの問題に触れて、この紹介を閉じたいと思う。それは、この時期のチャヤーノフにおけるいわば技術主義的な思考の拡大と、それによって生じる内面的な思想的バランスの崩壊といった問題にかかわる。

チャヤーノフが社会主義的大経営支持の立場への転換を表明したとき、彼自身がその転換の主たる理由としたのは、さきにもみたようにアメリカ式農業機械化技術の巨大な意義ということであった。

「農業技術の新しい諸要素の今後の発展がひきおこすにちがいない経済的社会的再建のありうべき形態について、何がしか詳細な予測を与えるのは我々の任務ではないし、またそれを任務とすることもできない。しかしながら、この再建が確固たる歴史的必然として認識されるかぎり、農業組織について我々がもっているふつうのすべての観念、我々の科学がもっている基本的概念や組織的原理を、農学のほぼすべての部分において根本的に再検討することも我々の確固たる義務である。」（⑥ стр. 40）

この時期、チャヤーノフの農業技術革新についての特別な関心は、単に労働過程の機械化という点にとどまらず、農作物の生育過程にかかわる農業技術の根本的変革にも向けられた。一九二八年に発表した論文④『農業のありうべき将来』はそうした技術の側面への彼の関心をうかがわせるものである。そこで彼は、今日、農事試験所や実験室の中で得られる技術的成果の延長線上に現われる将来の農業の姿を展望し、「農業ユートピア」сельскохозяйственная утопия を描いてみせた。そして更には「農業の廃止」ликвидация земледелия について語った。

チャヤーノフによれば、古来、農業 сельское хозяйство は土地 земля と不可分に結びつき、「農業」земледелие という言葉自体がその結びつきを表現してきたけれども、農業生産の技術的本質からいえば、土地そのもの、物質としての土壌それ自体は必ずしも必要なものではない。植物の生育の基礎となるのは、葉緑素と大気と太陽の光線だけである。「大気で湿り、大気と触れる一平方メートルの太陽光線の横断面――ここに農業 земледелие 発展の起点があり、植物の葉緑素とその後の植物タンパクの合成過程が今の所もっとも安価に、かつ完全に我々に有機物と炭水

化物を生みだしてくれる装置なのである。」（④ стр. 263）

ここから出発してチャヤーノフは今日実験段階にある九つの農業技術の要素を摘出し、それぞれの発展の見通しについて紹介した。植物の光エネルギー吸収率を高める葉緑素そのものの改良、二酸化炭素による空気施肥及び大気中からの窒素肥料の合成（バクテリア菌の分離に成功すれば「ひょっとしたら二〇年かそこらの後には、窒素を吸収するバクテリア菌を詰めた携帯用カプセルとして窒素肥料をすべての農村がふつうの注文の手紙で入手できるかもしれない」！④ стр. 276）、エチレンガス加工による成熟促進（青トマトの収穫後完熟）、トラクター用燃料とし経営内廃棄物、麦わらからのベンジン抽出、各種家畜の品種改良の諸形態、そして大気現象の規制（人工降雨技術）、がその例である（④ стр. 273-282）。しかし、以上の技術的諸要素はすべてまだ葉緑素の作用を前提としたものである、チャヤーノフによれば、これらの技術もそれが今日すでに試験所の段階にあるかぎり、数世代先かないしは「我々の孫、曾孫の時代」には実現可能な、いわば農業発展の「最小限綱領」にすぎない。更にその先には、「まだ今の所その解決の実験的形態にはないが、しかし完全に認識された問題」として存在する農学的技術を考えるならば、今日我々の想定しうるもっとも遠い将来の農業は、人間の生命に必要な全栄養物質の化学合成の方法による製造である、という。全有機物の基本元素は地上に無限に存在する窒素、水素、酸素及び炭素である。したがって、そうした元素からなる有機物の化学的合成技術の発見及びその合成に必要な無限のエネルギー源の利用（チャヤーノフは「地球の回転から生ずるエネルギーを何らかの仕方で得るジャイロスコープ」！（④ стр. 283）を案出する）が可能となれば、それはもはや農業 земледелие を不要なものとしてしまうであろう。したがって……と、チャヤーノフは言う……「本質的には将来の農業は」「重工業や軽工業の通常の生産と同じように、食料物質と繊維原料を化学反応による大気中の

窒素と炭酸ガスの同化作用によって工場的方法で製造する方法への移行である」。それは「語の現代的意味での農業の廃止」に他ならない。その時、「我々の食料品は工場の倉庫から箱詰で包装されたまま入手されるであろう」（④ стр. 260-261）。「いつ、何年に実現するか全く知らないが、しかし、それが実現されるのは疑いえない」将来の農業の姿はこのようなものだ、というのである。

だが、　とまた彼はいう。　それは「正真正銘のユートピア」である。その時、今日の農業が行われている「土地」はどうなるであろうか。この農業ユートピアを論じた論文は次のような叙述で結ばれている。

「他面では、人口そのものがそれほど密集して住むことはなくなることも考えねばならない。交通通信網の分野における改良と、少くともわが惑星の人口の十倍増によって、土地はすべて二面にひろがる田園都市 сплошные города-сады に一変してしまうであろう。この田園都市は、大気の清浄を目的とする花と植物の畑か、あるいは化学的生産方法ではおそらく決して再現しえない香りと味覚をもった果実をもたらす果樹園が、広大に数十キロメートルにわたって広がり、それによって区画されるであろう。美学的考慮によって我が大地の残りの部分は公園 сад がおおうことであろう。そこには今日の耕地や草木、亜麻、ひまわり栽培のかわりに、スミレやバラ、そして未知の全く驚嘆するような将来の花が咲く、あでやかな花園が占めるであろう。すべての我々の栽培植物の中で、最良の未来と永遠性を保つのは、疑いもなく、めくるませる鮮かさと心地良い甘い芳香を放つ赤いバラである、ということができる。空気から将来の穀物と布地を製造する鋼鉄製機械によって駆逐される今日のすべての栽培植物も、まさにこの赤いバラにその場所を譲らねばならぬであろう。」（④ стр. 284-285）

チャヤーノフが、「勤労的家族経営」の概念の放棄、著しく専門化した大規模機械化農業の支持者への「転向」を、

彼自ら、科学技術の無限の進化への「信仰」によって、内面的に「正当化」しようとした時、かつて一九二〇年に描かれた「農民ユートピア」крестьянская утопия[19]は右にみるような技術主義的な「農業ユートピア」сельскохозяйственная утопия に姿をかえて再出した。

それは同時に、農業専門家としての科学的理性と彼個人の美学的感性の分裂を表わすものにほかならないように思う。「ひょっとしたら煙突のない、しかも今日のわれわれの設備とは似ても似つかぬプラントを備えた本ものの工場」から、すべての食料品がパック詰で人々の食卓に届けられる、この味気ない人間生活――とチャヤーノフはいいたいのであろう――が出現するとき、チャヤーノフにとっては、地上には「装飾用の園芸だけが残り、我が地球の表面は公園に転化」していなければならないのである。ただ「微妙な芳香と味覚質」だけは工場的方法で製造できない、あるいはまた「すべての我々の栽培植物の中で最良の将来と永遠性をもつのは、疑いもなく、めくるませる鮮かさと心地良い甘い芳香を放つ赤いバラだ」〔傍点―筆者〕というとき、チャヤーノフの中には一本調子の技術の進化に対する明らかな「抵抗」がある。

思えば、一九二〇年に彼の描いた「農民ユートピア国」は、古代ルーシ以来ロシアの「経済制度の基礎」を成していたとされる個人農民経営の織りなす田園ユートピアと、他方で「国のもっとも強力な創造力の一つ」とされた「プロメテウスの創造の火花をもつ若い一団」（「芸術と科学の若い秀才たち」）のための英才教育施設及びそこから生みだされる高度な科学技術とが共存する世界であった。[20] また、かつてチャヤーノフが農業指導員の指導手引書として書いた『社会農学の理論と方法』（一九二二年）（«Основные идеи и методы работы общественной агрономии», 1922.）の中には、次のような興味深い一節があった。

「問題は、農民の世界観や経験の中には、我々が「農民に向って行なう」講話の土台を組み立てるためにひきだしうる諸概念の他に、現代の科学や倫理と著しく矛盾する多くの概念と観念が含まれているという点にある。

例えばそれに属するものとして、周知のように空天の雷鳴は予言者イリアの車 колесница Илии пророка から発するという観念がある。

我々はこのまちがった観念と闘って民衆の意識からこれを追い出してしまうべきか、それとも民衆の世界観が無定型で分散した状態にあることを利用して、単にこれを無視して、それとは無関係に農民の頭脳の中に科学的世界観の殿堂をうちたてるべきであろうか。

我々は、唯一採用しうるのは第二の方法であろうと思う。というのは、講演者は数世紀にわたってつくられてきたイメージや諸概念と論争すると、その観念をくつがえすに充分な権威をもたず、かえって聴衆の意識の中にそれらの観念をよびさますことによって、余計な、克服しがたい障壁をつくってしまう場合が多いからである。

第二に、列播種機をとるかそれとも雷雲の上に轟く予言者イリアの車をとるか、とずばりと突かれた質問に対しては、我々自身にもまだはっきりと答える用意がないからである。

我々が思うには、ロシア再生の任務は、農民層に対して、彼らの古くからの叙事詩を破壊することなしに現代の科学的世界観を紹介することであり、実際生活の世界では予言者イリアの車は放電に常をゆずらねばならぬが、実際生活を離れたときには、それは伝説 легенда となって、農民生活の中では名誉ある地位を占めねばならぬ。」[21]

先進的な科学の所産と審美的に昇華された詩的な農民的世界の並存――これがチャヤーノフの思想に一貫した基本的なオリエンテーションであったように思われる。晩年のチャヤーノフは、鋼鉄製の機械によって後者の地盤が掘り

くずされていく祖国の現実の中にあって、農業専門家としての自己証明 self-certification を得るために前者の方に大きく肩を入れたことによって、彼の内面世界には大きな亀裂が走ったのではなかろうか。「農業ユートピア」の世界に花開く「赤いバラ」こそは、チャヤーノフ個人にとって、「最良の将来と永遠性」をもつものだったのである。

しかし、ソホーズ研究に従事するチャヤーノフ、及び逮捕以後のチャヤーノフの内面世界をうかがい知る資料をわれわれはもはやもたない。したがってこれ以上先に進むことは推測の世界に迷い込むことになるであろう。チャヤーノフの思想全体における技術主義的思考と田園ユートピアの問題については、彼が残したしかるべき資料に基づき、稿を改めて考えることにしたい。

註

(1) チャヤーノフの著作目録については、一九六七年に彼の主な著作を収集し、それを八巻本の著作集として編集した B. Kerblay の手になるものがあり、またその後小島修一氏による綿密な調査による補充もなされ、今日われわれはほぼその全貌を知ることができる。Oeuvres choisies de A. V. Čajanov, ed. by B. Kerblay, Jonson Reprint, 1967, Vol. 1, pp. 71–91; Shuichi Kojima, Russische Neo-narodniki in der agrarwirtschaftlichen Forschung—Eine Bibliographie…, 『甲南経済学論集』第二六巻第二号、七一—七五頁。しかし、これまでの所、ソ連国内で発表されたものに限っていえば、チャヤーノフの著作は一九二九年末までのものが知られているだけで、三〇年以降のものは知られていない。したがって、右の両者の手になるリストにも本論文は載っていない。本論文は一九三〇年四月に発表されたもので、その発表時期の点からいっても、またその内容からいっても興味深いものを含んでいるので、チャヤーノフのソホーズ研究の紹介もかねて、敢えて翻訳を試みた次第である。なお、国外では同じ一九三〇年四月付の自分の手になる序文を付して、チャヤーノフは『農業適正規模論』のドイツ語版を出版している。《Die Optimalen Betriebsgrössen in der Landwirtschaft», Berlin, 1930.

（原題は «Оптимальные размеры сельско-хозяйственных предприятий», 3-е изд., 1928.）

（2）B. Kerblay, A. V. Chayanov: Life, Career, Works, in《A. V. Chayanov, on the Theory of Peasant Economy》, Homewood Illinois, 1966, pp. Ix-Ixiv; N. Jasny, The Socialized Agriculture of the USSR, Stanford Univ. Press, 1949, pp. 27-28.

（3）チャヤーノフの農業協同組合論及びそれと農民経済論との内的連関については、拙稿「ア・ヴェ・チャヤーノフの『協同組合論』（一九二七年）――ネオ・ナロードニキ主義の農村協同化構想――」『商学論集』五〇巻三号を参照。

（4）一九二七―二八年にコム・アカデミー農業セクションとチミリャーゼフ農業アカデミー付属農業経済研究所で行われた二つの公開討論会。この論争はクリツマン学派を中心とするマルクス主義農学者から、チャヤーノフを中心とする「組織生産学派」に対する全面攻撃の開始を告げるものとなった。S. Solomon, The Soviet Agrarian Debate, A Controversy in Social Science, 1923-1929, Westview Press, 1977, pp. 115-140, ; Н. К. Фигуровская, Аграрные Проблемы в Советской Экономической Литературе 20-х годов, М., 1978, стр. 87-137.

（5）スターリン「ソ同盟における農業政策の諸問題について」『スターリン全集』第十二巻、一六七―一九二頁。

（6）一九二九年二月十五日付『経済新聞』紙上で、（前掲のチャヤーノフの著作⑥）自分の過去の見解は時代の状況に制約されたものであることを指摘しながらも（その意味では、過去の立場と見解の弁護でもあるが）、現在進行中の地区規模の全面的集団化に対して、次のように述べて明確な支持を表明した。「言葉足らずで非難されないように、私は次のことを強調しておく必要があると考える。将来の農業組織形態を私はソホーズ、コルホーズ、協同組合及び残存した個人経営の混合物 конгломерат としてではなく、その組織の詳細はもとより予想できないが、郷全体の単一の共同経営として考えている」（A. В. Чаянов, От классовой крестьянской кооперации к социалистической реконструкции сельского хозяйства, «Экономическая жизнь», 15 февраля 1929 г.）。これは小農維持論の否定であるばかりか、一九二七年

の『協同組合論』で考えられていた構想をも否定するものであった。なぜなら、後者の構想においては、私的な家族経営に適合的な一部の経営部門を残すことと共に、他方では現存する農業コムーナ、アルチェリなどの集団経営も、末端協同組合のシステム система первичной кооперации の中にそのメンバーとして包括すること、この点にポイントがあったからである。その意味で『協同組合論』段階では、地区経済を「混合物」コングロメラット と表現しえたのである。А. В. Чаянов, Основные идеи и формы организации сельско-хозяйственной кооперации, 2-е изд. М, 1927, стр. 341-342. なお筆者は未見であるが、二九年十二月十二日付『農業新聞』編集部宛の「手紙」（前掲のチャヤーノフの著作⑨）の中でも同僚マカロフとともに、「我が国民経済の社会主義的再建の総路線と完全に一致した新しい立場」を表明した。«Труды первой всесоюзной конференции аграрников-марксистов», т. I, стр. 38; R. W. Davies, The Socialist Offensive, 1929-30, Macmillan Pr., 1980, p. 175. 荒田、奥田訳『社会主義的攻勢』（上）、一九八一年、御茶の水書房、二三三頁。

(7) «Труды первой всесоюзной конференции……», т. I, стр. 38.

(8) «Правда», 3 сентября 1930 г.; R. W. Davies, The Socialist Offensive, pp. 373-374. なおチャヤーノフ逮捕の日時は不明である。これについては諸説があるが、確実なことはまだいえない。

(9) 逮捕以後死去するまでのチャヤーノフの消息について触れているのは Л. Чертков, А. В. Чаянов как прозаик, в кн. Александр Чаянов, История парикмахерской куклы и другие сочинения ботаника X, Russica Publishers, N. Y. 1982, p. 26 と Глеб Струве, О Чаянове и его утопии, в кн. Ив. Кремнев (А. Чаянов), Путешествие моего брата Алексея в страну крестьянской утопии, Silver Age Publishing Co. N. Y. 1981. p. 6 である。なおチャヤーノフの未亡人が彼の死亡の日付を三九年三月三〇日だと伝えたという。R. E. F. Smith, The Russian Peasant, 1920 & 1984, London, 1977, p. 7.

(10) 新ソホーズ建設にかんする党及び政府の決定過程については、М. Л. Богденко, Строительство зерновых совхозов

в 1928-1932 гг., М., 1958, стр. 22-38.

(11) 「一億プード」（一六五万トン）という数字は、当時のクラーク経営全体の生産を穀物ソホーズにとって代えることをねらいとしたものであった。有名なネムチーノフ B. C. Немчинов の穀物商品化率表では穀物ソホーズの建設開始以前にクラークの商品化穀物は一億二、六〇〇万プードと算出されていた。И. Е. Зеленин, Совхозы СССР в годы довоенных пятилеток, 1928-1941, М., 1982, стр. 34.

(12) КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК, 9-е изд. Т. 4, стр. 354-355; Коллективизация сельского хозяйства, М., 1957, стр. 67-68.

(13) А. В. Чаянов, Основные идеи и формы организации сельскохозяйственной кооперации, изд. 2-е. М., 1927, стр. 342 343, 356. なお、一九二七年段階でのチャヤーノフのコルホーズ論については、前掲拙稿三一五—三二〇頁参照。

(14) チャヤーノフは、党政治局の特別委員会の審議が始まったとき（一九二八年五月）、委員会の拡大会議で、新ソホーズ建設に公然と反対はしなかったが、マカロフ、ドヤンコ А. Г. Дорянко らとともに、カードルの不足、乾燥地区では大規模穀物ソホーズ建設の経験がないことを主な理由にして、短期間で実現は不可能だ、と述べた、という。М. Л. Богденко, указ. соч., стр. 25.

(15) チャヤーノフはこの点にかかわって次のように述べている。

「筆者は、おそらく他の誰よりも家族経営の抵抗力をよく知っているつもりである。しかし、もし新しいアメリカ式技術の組織力が我々の計算するような経済的組織的効果をもたらすならば、おそらくはきっとそうなるであろうが、もしそうだとすれば、たとえその〔農産物〕加工と商業関係を協同組合化したとしても、家族的小経営の今後の存在を擁護することは、徐々に近づく死の苦悶を運命づけられた数世代の存続を擁護することを意味する。更に言えば、この擁護は十八世紀と十九

世紀の端境期に資本主義工場の斧からツンドラ手工業者を擁護するのと同じように見込みのないことである。」(⑥ стр. 50)

(16) КПСС в резолюциях и решениях...., стр. 354.

(17) 『スターリン全集』第十二巻、一五〇頁。なお、この一文は当時のソホーズ建設の雰囲気をもっともよく表わしており、たとえば、北カフカースのユーリスク管区に建設された有名なソホーズ『ギガント』の経営を全国に広く報告した論集 Зерносовхоз „Гигант", Ростов на Дону, 1930. の劈頭を飾っている。

(18) И. Е. Зеленин, Зерносовхозы СССР (1933—1941 г.), стр. 19-24. その一定の是正過程が、一九三一年十一月二七日付党中央委員会ソ連邦人民委員会議の決定『穀物ソホーズの活動について』から始まる。

(19) イワン・クレムネフのペンネームでチャヤーノフが書いた有名なユートピア小説、«Путешествие моего брата Алексея в страну крестьянской утопии» М., 1920. 和田春樹、おき手氏の邦訳がある。『農民ユートピア国旅行記』晶文社、一九八四年。

(20) Там же, стр. 20. 邦訳五二頁。

(21) А. В. Чаянов, Основные идеи и методы работы общественной агрономии, М., 1922, стр. 46-47.

〔付記〕

本稿は昭和六一年度日本学術振興会特定国派遣研究員としてソ連邦にて研究した成果の一部である。